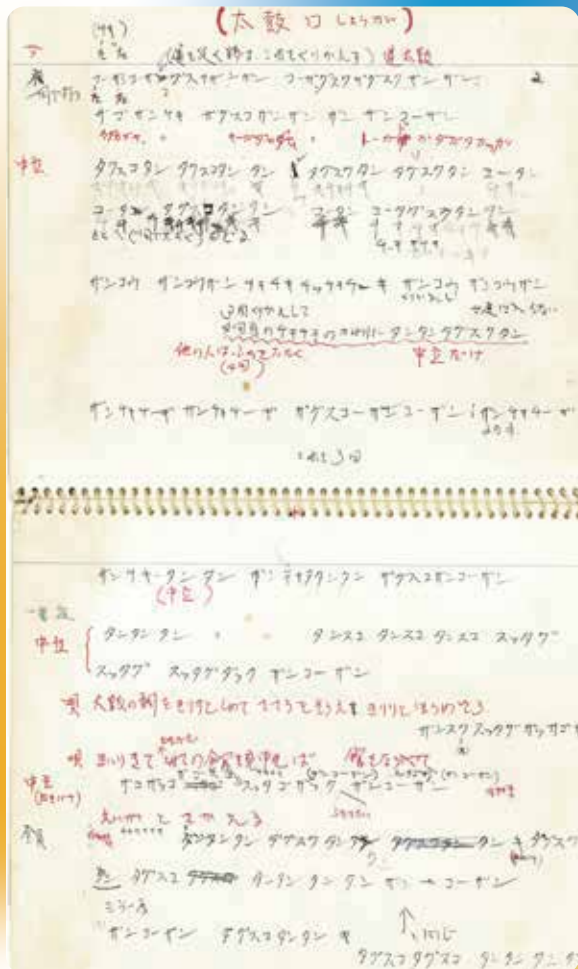




(左) 昭和30年代後半岩手県花巻市土沢
「八つ鹿踊り」黛 琉美取材ノート(太鼓
の口唱歌)

(右上) 舞台化された「綾子舞(小原木踊)」

(右中) 黛 節子 構成演出で舞台化された
「鹿踊り」

(右下) 取材現地で入手した絵葉書「鹿踊り」

資料提供: 黛 琉美(本誌本文参照)



ごあいさつ

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団
理事長 三隅 治雄

昨年令和2年度発足時にご挨拶申し上げるべきところ、新型コロナウイルス流行のため書面会議となり、ご拝眉を得ぬまま今日に及び、深くお詫び申し上げます。

ご承知の通り前理事長加戸守行先生は昨年3月21日にご逝去になりました。文化庁次長時代から存じ上げておりましたが、抜群の行政力を謳われ、反面、芸能を愛し、粋で、洒脱で、暖かなお人柄には誰もが魅せられておりました。財団に対しましても、愛媛県知事ご退任後、国事にも携わる繁多なご用務の中、舞踊団を励まし、経営・財務にも適切な指示を与えて、活路を拓いてくださいました。

その優れた前理事長の後継を託された私は、無能無才、わずかに、創立者 黛 節子師とは若い時からのご縁で、師の舞踊活動のお手伝いもし、師の志の高さと情熱、行動力の強靭さに感じ入っておりましたので、寸時でもお役に立てばと思考し、就任をお引き受けした次第でございます。

毎度、赤坂田町のビルを訪ねますと、創立者の生命がいまも躍動し続けているかに感じます。その灼熱の踊躍をいかに伝承し、昇華させるかがわれわれに課せられた使命と存じます。そのための積極的なご助言、ご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます。



黛舞踊が志向するもの

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団
理事長 三隅 治雄

黛 節子先生との初対面は、もう60年も前の1961年でした。日を忘れましたが突然電話がかかって「お会いしたい」と言う。向こうは著名、こちらは若輩。「ハイどうぞ」と答えて、数日後、新橋の第一ホテルでお目にかかりました。キラキラ光る大きな瞳が印象的でした。こちらをジッと見つめて「お願いがあります。いままで創作を続けてきたが、踊りの原点をたずねたい。何を見ればよいか。教えて…」ということでした。それからいろいろお話しましたが、何がどうとも思い出せないほど、先生は、これまでの試み、挫折、迷い、抱負などなどを留まるところなく語って、その熱気に、のけぞりました。これはかなわぬ、手に負えぬ思いながらも、混じりつけのない純粹さに打たれて、「私にできることがあれば…」と肯いたのが、長い縁の始まりでした。

当時、赤坂田町周辺はしっとりとした花街で、料亭以外もの静かで、人通りも少なく、柵をめぐらせた平家の稽古場の窓は明々、中は節子先生の叱咤の声^{あかあか}が赤々と燃えていました。財団の常務理事だった故大野 晃氏^{しおど}が側にいて、稽古・雑事^{あかあか}いっさいをテキパキこなすのに敬服しました。芸には我儘放題な師の、よい面だけを巧みに引き出す大野さんの誠心とプロデュースが黛作品の魅力を育てたと、いまにして思います。

私は師の求めるままに、鹿踊り、エンブリなどに見る東北民衆の土俗のバイタリティ、千葉の鬼来迎^{きらいごう}などに見る日本民衆の他界観などを語り、鬼来迎の現地を案内したりしたのですが、先生はとっさに、ぜひ作品化したいと言う。それで数日考えてお会いすると、それはそれ、今日は「越後の綾子舞を…」と言う。ならば、こういう先生方にご相談をと答えて、鬼来迎は沙汰済み。と言って、移り気ではありません。鬼来迎の感動は脳の芸術半球にチャンとストックし、次なる対象にチャレンジするのです。遠山敦子元文部大臣は、情熱にひた走る人と評し、田中英機常務理事は青春のまま老いることのない人と評しましたが、まさに、青春が弾け飛ぶ^{はじ}感じの方で、アッこれがいいなあ、あれを学びたいと次々チャレンジして、弾け飛んだ先に生まれたのが韓国・中国少数民族などとの国際交流だったのですね。

先生には、根本に、様式化した歌舞伎諸流派舞踊を原点から見直し、わが民族が様々な環境の中から創出してきた多種多様な舞踊をみずから体感し、体現して、日本の多彩な民族舞踊の輝きを世界に顕示したいとの希求があったと思います。その過程で、同根同血かも知れぬ周辺民族の舞踊との交流を密にし、共同研究・合同公演などを通じて自国の舞踊の源流、源泉を訪ねアジアにおける互いの民族の舞踊の特質を明らめ、親善を深めようとしてきました。ただ、創立者は雄途半ばも成らずしてご他界になり、志は、後継の舞踊団に託されています。多くの伝統芸能を一身の周りに配した黛曼茶羅^{まゆずみまんだら}を掲げた舞踊団の蹶起^{けつき}を待つゆえんです。



節子先生との旅

黛民族舞踊団代表

黛 琉美

黛節子先生は、昭和35年(1960)頃から数年、三カ所ほどの民俗芸能採訪の旅に出かけられました。同行させて頂いた私は、村の娘さんの踊りや笛や太鼓そして土地の人達とのコミュニケーションに、先生が精力的に取り組まれているお姿に接し、感動してしまったことをよく覚えております。

新潟県刈羽郡女谷の「綾子舞」、小原木踊り・常陸踊り等々を拝見し、地元の方々に稽古して頂きました。歩き方、ねばり強い腰の入れ方、上半身の捻り方、扇を持つ手首の返しなど何度も質問されながら稽古をなさる先生に村の人たちもびっくりされ、とても熱く教えて下さいました。ビデオなどのない時代ですから、とにかく身体で覚え、ノートに残し写真を撮る作業でした。稽古の合間には、村の古老の唄や思い出話にほっと心癒されました。長老の一人は、毎日山へ登り「追分」を唄い、声の具合で季節の移り変わりを感じ、農作業の段取りに役立てたそうです。現地の人達との心のふれあい、その大切さと素晴らしさを節子先生は教えて下さったように思います。二年後に岩手県花巻市土沢へ「八つ鹿踊り」を取材に、おそれ多くも先生と二人で行くことになり、カバン持ちは私の役目なのですが、カバンの代わりにその当時の重いオープンリールのテープレコーダーをかついで現地に入りました。村には一軒しかない宿に泊って、稽古は鄙びた公民館、宿から歩いて3、40分かかりました。地元の方々の威勢のいい元気な声の飛び交うなかで、太鼓の口唱歌(太鼓の打ち方を言葉で表現すること)が、聞き取れなくて苦労しました。地元の記録によれば、鹿踊りは村上天皇の天暦5年(951)、空也上人が山中の生活の中で、狩人の犠牲となった鹿の弔いのため、鹿の生態を真似て芸能化したものが起源とされているとあります。永い歴史の流れのなかで、村人が綿々と唄い奏で踊り次いできた精神の強さが偲ばれ、素晴らしいことと思いました。

(口唱歌) ザンスク ザンスク ザンスクツス ザツザコザコザクスクザンザンザンチキチ

(掛け声) 太鼓の調緒きりりとしめて ささらを揃えてきりと褒めそろ褒めそろー

太鼓と唄と踊りの三つが一つになります。みごとに揃った太鼓のリズムと動きに魅せられ、時の経つのも忘れ熱心な教えを頂きました。また特に中立(鹿踊りの中心役)のシーツと言う口の合図が、乱打している太鼓が鳴り止んだり七頭の態勢が変わる合図となっていることに、節子先生はいたく感心なさっておいででした。不思議な力をもつ発唱でした。

すっかり日暮れて外は闇の中、懐中電灯を頼りに宿に向かって歩いているとき、最上川の橋の中ほどで水面がゆらゆらと煌めいて、頭上を仰ぐと空一面の星空が私達の身体を包み込むように光り輝いていたのです。先生と手を取り合って感動の声をあげてしまいました。取材旅行の先生との思い出は、この時この場面が最も深く心に焼きついております。そして芸道の神髄を教えて頂いたと感謝いたしております。

東京に戻ってからの先生の稽古は大へん厳しく迫真の力が加わり、旅の先生のやさしい笑顔が懐かしくさえ思われました。リサイタルに向けて、取材で学んできた振りや構成を舞台作品として創り上げる仕事に没頭されていました。踊りの振りを深く掘り起こしていく事のなかで、芸道の深さと神髄を勉強させて頂きました。今後は若い舞踊団員の育成と節子先生の魂のこもった作品を継承し発表することに努力していきたいと、いま自分を励ましております。

令和3年度 黛民族舞踊団公演予定（令和3年5月現在）

【自主公演】

12月11日(土)・12日(日)「黛スタジオ公演」予定

詳細：コロナウイルス禍、蔓延状況等を見据え開催検討中

【参加公演】

5月29日(土)「新宿芸術家協会 30+1 周年記念公演」

詳細：会場 四谷区民ホール

開演 開演 17:00(開場 16:00)

入場券(前売り指定席)4500 円

主催 新宿芸術家協会

(TEL:03-3320-9834)



一般財団法人 黛民族舞踊文化財団のあらまし

当財団は、わが国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民俗芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し(将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています)また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民族芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的を御理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げます次第です。

つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げます次第です。

黛民族舞踊文化財団賛助会員規程

一、 賛助会員とは、この法人の趣旨目的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)の方々の名称です。

二、 会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます。)

- | | | |
|----------|------------|-------|
| ア、 個人の場合 | 個人会員 | 五千円以上 |
| | 特別個人会員 | 十万円以上 |
| イ、 法人の場合 | 法人(団体)会員 | 十万円以上 |
| | 特別法人(団体)会員 | 百万円以上 |

三、 賛助会員の特典

ア、 特別会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演全の切符御一名様御招待
- 2 「財団の宴」など種々の行事に御招待

イ、 会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演全の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛てに、御請求くださいませ。領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。